

# 若い移住者と鬼嫁たちが松崎商店街を盛り上げる！



JR 松崎駅前<sup>さんばちいち</sup>に広がる松崎商店街。ここを舞台に、三八市を復活させた自称鬼嫁のお母さんたちが若い移住者を全力で応援しています。なぜ若者が松崎に魅せられ移住するのか？ともに商店街を盛り上げる若い移住者と商店街の鬼嫁のみなさんにお話を伺いました。

## 三八市を復活した鬼嫁たち

湯梨浜町松崎地区は、明治以前から、毎年稲刈りの時季に農耕具や日用品を売る市が立っていました。毎年10月の3と8のつく日に市を立てたことから三八市と呼ばれるようになり、各地から人が訪れ活気がありました。しかしその後、町の人が少なくなるとともに市も活気を失っていきました。

この状況をなんとかしなければ！と立ち上がったのが、商店街の女性たちです。中心となった野口智恵子<sup>のぐちえこ</sup>さんは、商店街で生まれ育ち、子どものころから三八市を身近に見てきました。平成22年、三八市の衰退を嘆いた野口さんが、三津国美枝子<sup>みつくにみえこ</sup>さんや立木てる子<sup>ついき</sup>さんら商店街の女性とともに三八市実行委員会を立ち上げ、にぎやかな市へと復活させました。

平成27年には、三八市で何か目玉となるようなことをしたいと考え、鬼嫁の里プロジェクトを設立。自らを「鬼嫁」と称し、鬼嫁度を競う「鬼嫁コンテスト」を開催しました。他にも、鬼にちなんだ商品をイベントなどで販売する「鬼が島」、保育園や福祉施設へ出向き梨太郎の鬼嫁退治を演じる「鬼嫁劇団」など、斬新なアイデアで次々と新しいことに挑戦しています。



JR 松崎駅を出るとすぐ目の前に松崎商店街が広がります。



鬼嫁コンテスト：県外からの参加もあるなど毎年大盛況です。





衣装も手作りし、メイクもばっちり！の鬼嫁たち

## 「三八市に行ってみない？」から始まった移住

「最初に松崎に移住したのは、宿泊とカフェスペースがあり、お客さんと地元の人が交流できるゲストハウス『たみ』を営む三宅航太郎さんでした」と話す野口さん。三八市を復活させた次の年、野口さんの弟の同僚が岡山県で開催されていた瀬戸内国際芸術祭を訪れ、芸術祭の一環でゲストハウスを運営していた三宅さんに、「松崎というところで、おもしろいことをしているから行って見ない？」と、声をかけたのがはじまりです。岡山県出身の三宅さんは、芸術祭が終わった後に新たな活動の拠点を探していて、かつてのにぎわいが失われた松崎を気に入ったそうです。「かえってそのほうがいいって言ってきて。悲しいようなうれしような」と三津国さんは笑います。

その後、三宅さんの知り合いで福岡県出身の森哲也さん<sup>もりてつや</sup>が移住して本屋を起業しました。次に森さんの知り合いで映像作家だった奈良県出身の中森圭二郎さん<sup>なかもりけいじろう</sup>が移住して塾を起業。その後も、知り合いつながりで移住者が少しずつ増え、古着屋や美容室、飲食店など地元の人や観光客が集うスポットが誕生しています。

## ともに商店街を盛り上げる！

「ここに来る若者たちは、社会問題に関心を持ち、自ら行動を起こしていく人たち。消費だけでなく生き方に幸せを見出し、なりわいを自分たちで創るたくましくて賢い人たちばかり」と鬼嫁たちは優しくほほ笑みます。

三八市を復活させた翌年の平成23年に、商店街にある野口さんの実家を改修し、地元の人をはじめだれでも交流ができる場として「梅や」が誕生しました。「三八市だけだったら、多分定住まではされなかったと思います。時には移住相談の窓口の役目を果たしました」と立木さん。「梅や」の存在はとても大きく、拠点ができたことで地元の人と移住者のコミュニケーションが進み、移住者同士の助け合いも生まれました。

三八市を復活させてからもうすぐ10年。最近では、若い移住者たちも三八市実行委員会に入り、鬼嫁たちとともにイベントの企画に携わります。「力仕事やイベントの運営には、若い人がいてくれると本当に助かります」と鬼嫁たちもうれしそうです。

## 鬼嫁の心得5ヶ条

1. 何にも負けないステキな笑顔
2. 地域の支え
3. 仲間の絆
4. 好奇心山盛り、やればできる！
5. 元気な湯梨浜、我ら鬼嫁

「見切り発車でもいいから行動を起こすことが大事」と言う鬼嫁たち。「できなかったときは、方向修正をすればいい。鬼嫁の精神は、とにかく前進あるのみです」とっこり。

## おせっかいで若い移住者を全力で応援！

「移住者みんなから慕われている、鬼嫁のドンがいます。大鬼嫁と呼ばれている私の母です。母は、若い人にどこから来て何をしているのかということを全く聞かないんです。人を見たらわかるって言って。母はどんな人でも受け入れるという人で、みんな孫みたいだって言っています。来た人は誰でも受け入れるという三八市の精神を受け継いでいるんですよ」と野口さん。

鬼嫁たちは、若い移住者が家や店舗を探しているときには物件探しにも協力し、いつも全力で応援してきました。また、「物は買うな！」とアドバイスをするそうです。鬼嫁たちのネットワークで家電製品や生活に必要なものは自然と集まってくるので、「まずは必要なものをリストアップして！と伝えます」と三津国さん。さらに、鬼嫁たちは地元の人との付き合い方などについて、時に厳しく若い移住者たちに教えてきました。

また、地区単位の行事にも移住者が参加します。「物で返すとかではなくて、三八市の運営を一緒にしたり、祭りや運動会にでてくれたりすることが一番ありがたいです」とっこり。

鬼嫁たちと若い移住者たちが商店街をともに盛り上げ、奮闘中です。

## 移住者 三宅友紀子さん<sup>みやけゆきこ</sup>（境港市出身）

私は、「たみ」ができてから、従業員として働き始めました。結婚後は、境港から松崎に移り住みました。松崎のお母さんたちがとても元気で、それはきっと鬼嫁の活動があったからだと思います。お母さんたちのがんばる姿を見て、自分もこのまちでやっていけると思えるようになりました。お母さんたちの存在がとても大きかったですね。

住民の方との付き合い方についても、時には厳しく教わりました。私たちはお母さんたちや住民の方にたくさん助けられているけれど、当たり前になってはだめだということを、いつも移住者同士で話しています。

私は、このまち全体が一つの大きな家みたいだと感じています。何かとても大きな家の中を歩いているような感覚があって、血はつながっていないのですが、何かあったときは声をかけて頼ってもいいっていう、一番下でキャッチしてくれるような安心感があります。



移住者 <sup>なかもり</sup> 中森 <sup>けいしろう</sup> 圭二 さん (奈良県出身)

森さんが、松崎で本屋を開こうとしていることを知り、森さんを題材にしたドキュメンタリー映画を制作するために松崎を訪問するうちに、まちの人とも仲良くなって。あまり旅先でそのまちの人と話す機会はないと思いますが、松崎はただ歩いているだけでまちの人が声をかけてくれました。平成27年に松崎に移住し、結婚して子どもが生まれると、家庭を大切にしながら仕事をしたいと思うようになり、映像の仕事の続けながら松崎ゼミナールという塾をはじめました。子どもへの学習指導のほか、誰にとっても居心地のいい場所をつくるため、社会問題について考えるイベントや映画の上映会などもしています。

移住したばかりのころは、鬼嫁のみなさんに仕事や生活のことなど、人に相談できないようなことまで相談に乗ってもらいました。私にとって、どこでもよかったのではなく、松崎だから移住を決めました。都市部だとなかなか感じることができない見えない部分でまちの人とつながっている感覚があります。



中森さんが営む塾「松崎ゼミナール」  
学習指導のほかにイベントなどを開催します。



森さん夫妻が営む本屋「汽水空港」  
目の前に東郷池が広がります。カフェもあって、地元の観光スポットになりつつあります。



移住者 <sup>うえやまあすき</sup> 上山 梓 さん (鳥取市出身)

私は鳥取市出身で、鳥取大学在学中に「たみ」に住みながら、「梅や」の運営を手伝っていました。就職すると、「梅や」に関わるのが全くできなくなってしまい、それで仕事を辞めて松崎のまちのことに本気で関わりたいと思うようになりました。そのくらい、私にとって「梅や」が大切な場所だということがわかって。今はアルバイトを掛けもちしながら、「梅や」にも関わり続けています。

私も鬼嫁の一人です。若いので、まだ角が1本の小鬼嫁ですけどね。



毎週火曜日のうめやカフェには、上山さんが待っています。

近所のお年寄りが集まったり、若い人も遊びにきたり  
小さい子が保育園に行く前に寄ったり、たまには旅人も迷い込んだり  
「梅や」にはいろいろな人が訪れます。

### うめやカフェとは？

岡村玩具店さんの旧店舗部分をお借りして  
毎週火曜日 午前10時～12時の間  
コーヒー＆お菓子を300円で提供しています。  
運営はすべてボランティアです。

いろいろな方のご協力で、  
野菜や豆腐、惣菜、パンなどの販売や  
絵本の読み聞かせ、お抹茶教室、  
出張マッサージなどもしています。